

「ひよこの眼」の教材価値と実践試論

1 はじめに

山田詠美の「ひよこの眼」は今や高校定番教材となりつつあるといつてよく、数社の教科書で採用されている。しかし、その教材的意義という点で十分考察が深められてきたか、という点ではやや曖昧としか言いようがない。生徒に近い現実を描いているという点のみが注目され、どのような他者との出会いが描かれているのか、いないのか、という点がおざりにされてきたように思う。また、単なる「生」と「死」の描かれた小説として読まれ、小説末尾の「ひよこの目」についても、文中にある「諦観」以上にどの程度読みが深められてきたのか、疑わしい。そうした中で、五十嵐哲也氏は、語り手でもある亜紀を「自己の行動や感情をコントロールできず、他者からのアプローチによってのみ事を為し得、しかもその行

篠原武志

為に対しても他者からの否定的評価を恐れる少女、つまり『依存性人格』の少女として描かれている」と規定される。

さらに、次のように言われる。

依存性人格の亜紀にとって、幹生の死はこうした外的対象喪失のみならず、内的対象喪失を引き起こしたに違いない。それは対象喪失が実際の幹生の死を「予期して」引き起こされたものであることにも象徴的に示されている。そしてさらに、この内的対象喪失を描くために、先に述べた「生」を見つめた直後の「死」、という逆転的構造が必要であったこともまた間違いない。(中略) すなわち亜紀は依存性人格であるがゆえにその依存性を満たそうとして、自らの「思う通りに」他者、或いは他者と関わるなかで発生していく人生が動くことを望んでいた

わけであり、そうした当為像の崩壊、という内的対象喪失が幹生の死によってもたらされたわけである。こうした内的対象喪失が、つまるところ亜紀の依存性人格を揺るがせることは言うまでもない。

こうした五十嵐氏の論は示唆に富むものであるが、亜紀を「依存性人格」と規定するところや、語り手である「私」が過去の自分についてどのように批評しているかが十分あきらかではない、という点では私にとってやや不満も残るものであった。そうしたところが、語り手、あるいは〈機能としての語り手〉^③という仕掛けに注目していくことによって明らかにされていくことなのではないだろうか。そして、生徒がそうしたことに気づいていくことによって、生徒は、真に小説を批評しうるのではないか。

2 私の読み

改めて、読み直してみると、私にはこの作品は以下のように読めた。

この作品は、語り手である「私」が「まだ中学三年生でしかなかった」頃をふりかえって語っている。従って、大人になった「私」が子どもであった頃をふりかえって語っているということになる。

「ひよこの眼」の教材価値と実践試論

それは、結果としては、「私」が自身の大人になる契機となったことを語っているということでもある。この作品で大人になった契機とは、「ひよこの目」の正体を、「死を見つめる目」^④「諦観」^⑤だと知ってしまい、「この年齢にして、人間の思うとおりにいかないことがある」ことを知ってしまったことにある。それは具体的には幹生の死であるが、同時にそれは、幹生が「あの公園で、確かに生きようとして」おり、「人生に対して礼儀正しい人だった」にもかかわらず死という運命が訪れたと私に感じられることから起こる感覚でもあった。

こうした「思うとおりにいかないことがあるのを知ってしまった」という感覚は、しかし、五十嵐氏も言われるとおり、裏返せば、今までは「思うとおりにいかないことがある」というのを知らなかったということにもなる。

そこまでの亜紀は、作品冒頭部では、幹生の目にこだわってはいないが、それ以外は「私たち」の一員、いわば「皆」の一員であるに過ぎない。幹生とのことが噂になってからは、かえってそれを意識してぎくしゃくしてしまう。ここにあるのは、ある種、自意識過剰と言っていいまでの、「皆」の一員としてであろうとする意識である。もちろん、幹生を愛するようになってからの「私」は人目を気にしなくなる。しかし、「私は、その時、すでに、好きな男には、の

んきな幸せを授けたいと願うほどに大人になっていた」と語られながらも、「彼のことを心配しているというより、そうなったら（幹生が悲しい場所に置かれたら―篠原註）、自分自身がやるせないだろうと予想したからだだった」と告白されている。これは大人への第一段階ではあっても、あまりにも「自分勝手」な論理ではないだろうか。大人の愛というものが、互いを互いとして尊重するところに生まれるとしたら、少なくとも、この段階の「私」の幹生に対する愛は、決して本当の意味での大人の愛ではなかった。語り手の「私」は、そうした自分をひそかに「許していた」と過去形で語られる。これは、今の私が、そのような他者を占有化しようという愛などありえないということを知っているからではないのか。

「私」の当時の愛がそのようなものであるから、「私」と幹生は、やがて公園で、互いの愛を告白するが、そこでも微妙なずれが生じている。「私」は「私と話しているときは、私が相沢君のこと笑わせてあげられるからいいけど、一人のときは、そうじゃないから」と言う。ここには幹生を占有化したい、あるいは自己化したいという欲求がある。一方、「大人っぽい」とクラスメートに評された幹生はそうではない。「亜紀って変なやつだもん。おれの目が懐かしいって言ったりしてさ」と言う。「私」の幹生に対する愛が、幹生を自己の所有とすることに近い、自己と未分化なものと考えている

ことであるのに対して、幹生は亜紀を別個の（変な）人格として眺める。「私」にとつての幹生が自己化されるものであり、クラスメートとの関係も、「皆」の中の一人として、自己化されたもの（あるいは他者化された自己）でしかありえないのに対して、幹生は常に孤高の人であり続ける。幹生にとつて、他者は他者であり続ける。「私」との恋愛を確認しあつた後も、結局、父親に自殺の道連れにされる運命を受け入れている（と語り手の「私」は考えている）のだから、「私」の解釈した、幹生の「諦観」とは、自己の問題としての家庭の問題と、他者の問題としての恋愛を区別することもだとも言える。そこに「大人っぽい」と評価される所以もあろう。逆に「私」は、常に自分が所有できる他者を求めていたということになる。

「私」が、幹生と、幹生のポケットの中で手を握り合う行為は、言うまでもなくエロスの行為であるが、それは幹生にとつては「もしかしたら、なんとかなるかもしれない」という現実を生きるための行為である。一方、「私」にとつては「甘い毒のように」現実を忘れさせる行為であるのだ。幹生は常に、「死」という他者を見つめ続ける。しかし「私」は幹生の「死」という「了解不能の（他者）^④」を「なつかしさ」として感じながらも、結局、「恐ろしさのあまり」恋をしたのだと、語り手の「私」は認識している。

そうした「私」は、幹生の死によって、あるいは死の予測によって、はじめて現実をつきつけられる。もちろんこうした「私」は、幹生の生きようとしていた姿勢に、改めて気付く。だからこそ、幹生のことを「人生に対して礼儀正しい人」とするのである。しかし、例えそうであっても、幹生は死によって「私」から永久に奪われてしまうのである。「人生に対して礼儀正しい人だったのに」とは「私」の「悔しさ」を表す言葉として語られる。

幹生はむしろ「人生に対して礼儀正しい」、「あの時、確かに生きようとしていた」からこそ、その死は私を揺さぶる。それは「私」がいうように、「衝撃」ではなく、「悔しさ」である。「人生に対して礼儀正しい」にもかかわらず、礼儀正しいからこそ死なねばならぬというアイロニーに対する「悔しさ」なのである。

牛山恵氏は「私」の中の幹生とひよこの目の関係について、次のように言われる。

『私』は、ひよこを救えなかったことが、相沢を救えないことに連関していると、そこに因果律のようなものを見ようとしているのだが、真実はそうではない。相沢と『私』とは、結局、人間くさい世俗的なつながりを持たないままの、相手の人生に踏み込まないままの美しくはかない関係だったから、『私』は

何もしてあげられなかったのだ。^⑤

鋭い指摘だと思う。特に「私」の見る世界はいわば、「私」の主観に基づく世界に過ぎず、現実として「幹生」と「ひよこ」のそれぞれの死は別個であるというのは、その通りだろう。そして、両者が世俗的なつながりをもてなかったということも。

しかし、幹生の死は、「私」にとつては、やはり、幹生の「ひよこの目」に起因することとして意識されているというのは十分、留意しておく必要があるだろう。「私」の立場からいうとき、「ひよこの目」を意識し、幹生を「人生に対して礼儀正しい」と意識することは、幹生が生きていなければならないから、生き得ぬ存在として意識することである。それは、「私」にとつて、「私」の愛、幹生と「手を握り合うという行為によってはつなぎとめられえないことを悟ることだったのだ。

誰も誰かによって占有されることなどありえない。そして、誰も、占有によって他者を救うことなどできはしない。私は、幹生の死によってそのことに思い至らされる。だからこそ、私はそこで始めて、それまでの「（私の中の他者）^⑥」を倒壊させ、「死」を他者として認識する。「死ぬなんて憎らしいことだ」と。同時に幹生や、あるいは「ひよこの目」をもつ、死と隣接する誰かという、私にとつて

「了解不能の《他者》」と邂逅しかける。それゆえに、「私」は「死」というものを見つめている」はずの人物に、尋ねてみたい衝動に駆られながらも、その衝動に身を任せられない自己を見つめている。いわば、他者を他者として捉えながら、決してそれに踏み込むことは許されないことを知るのだ。

語り手である「私」に、幹生を、センチメンタルに追悼しようとする意図は希薄であろう。むしろセンチメンタルな追悼という範疇を越えて、幹生の死を冷徹に受けとめようとしている。「私」は幹生の死を悼んでいるというより、「人生に対して礼儀正しい人」が死ぬという不条理を憎んでいるのである。「私」は、他者を占有化する愛などありえないという人生の不条理を知ってしまった。もはや過去には戻れない。変容する自己を受け入れざるを得ないのである。そのとき、「なつかしむべきこと」としての過去を語っていく。

語り手としての「私」が自己の変容してしまった過程としての幹生の生と死を語り、他方、〈機能としての語り手〉が、大人として「なつかしむべきこと」のある彼女の今を、変容する自己を受け入れざるを得ないことを、そして、空虚感に支配された彼女の姿を、語っているのである。

ただし、同時に〈機能としての語り手〉はその姿を描写することでも語り手を批評しているともいえる。私の持った空虚感、あるいは

他者の姿を諦観として捉える捉え方は、一つの気づきではあっても、他者を己の理解できる範囲で割り切ろうとすることに他ならないからだ。今の「私」はそのような方法で過去を再構成しつつ、自己のアイデンティティを確定しつつあるともいえる。過去を「諦観」という言葉で割り切ろうとする彼女の姿勢は〈機能としての語り手〉からみたととき、やはり「了解不能の《他者》」に出会う機会を逃し、死を〈私の中の他者〉化する姿勢に過ぎないともいえるのだ。

3 幹生のみつめるもの

さて、中高一貫の男子校である本校でも、この数年、いわゆる不登校傾向などの「しんどくなる生徒」が増えている。その理由をある先輩教員と話したとき、その先輩教員が「彼らはキャラを演じることを強いられているのではないか」と分析された^⑦。「ひよこの眼」の教材価値が前述のように、生徒に、自己化した他者というものがあることが崩壊し、「了解不能の《他者》」が出現する過程を見つめさせることにあるとすれば、その実践によって、少しでも生徒達が、自分たちの「私の中の他者」を倒壊させるための一助となるのではないかと考えた。その際、必要になるのは語り手という存在を絶対化せず、生徒を語り手と対等の立場に引き上げることだろう。以下の実践は、本校の二〇〇六年度の高校一年生（一クラス四五名×五

クラス×週2コマ)を対象としたものである。授業にあたって藤原和好氏の提唱される「語り合う文学の授業」における「出会い」↓「読み深め」↓「交流」という三段階の指導過程を参考にした。^⑧

実際の授業では、一時間目に通読して、語句などの説明をし、二時間目にプロット上の問題点を中心にした説明をした。その後、三時間目で、次のような設問を出して、提出させた。私の文学教材の授業では、こうした設問を出した後、その答えの幾つかを生徒の作文の中から抽出し、「現代国語通信」というプリントとして配布している。

問一 この作品で、幹生はどんな性格として描かれているか。

あなたの分析も交えて答えよ。

問二 作品後半の「人生に対して礼儀正しい人」とはどのような意味か。あなたの分析も交えて答えよ。

問三 この作品で、「私」は冒頭、「私は、その時、まだ中学三年生だった」と語っている。「中学三年生」であった頃の「私」はどんな性格として描かれているか。あなたの分析も交えて答えよ。

問一では次のような答えが多かった

「ひよこの眼」の教材価値と実践試論

I彼は背負い切れぬほどの「もの」を背負っており、それを誰にも話さず、自分一人で苦悩している。しかし、そのようなふりを見せず、元気にふるまっている。彼は何事も自分で解決し、他人に迷惑をかけまいとする強い性格だ。

四時間目にこうした幹生の人物像を中心に議論した。

T:「前に書いてもらったけど、幹生ってどんな奴なんやろうね」

S1:「孤独、っていうか孤高の性格って感じ」

S2:「でも、それって幹生が人に交わらない、暗い奴やっていうことちゃうのん?」

T:「そういうこと書いた人も、一通り読んでみて、どう? 幹生ってただ暗いだけ?」

S3:「っていうか、亜紀も言ってるけど『私を含めたささいな事गरらに、とても興味を示すことができないほどに、何かに対して心を砕いて』いたんちゃうの?」

T:「そうやね。でも、その『何か』って、結局、何やったん?」

S4:「自分の家の家庭事情、貧乏さ。」

T:「そうかな。実際は別として、語り手の、現在の亜紀はどうかんがえてるんやった? 幹生のひとみっていうのはひよこの目とお

なじやったんやから：」

S5：「そうか、自分が死ぬっていう運命を予測して、それで他のクラスメートと親しくなれへんかったんや」

T：「そう。そうすると、幹生にとっては、少なくとも現在の語り手の亜紀の想定する幹生にとっては、死というのは定められた運命やったわけやね。」

五時間目に、問二の「人生に対して礼儀正しい人」について議論した。問二で多かった答えは次のようなものである。

Ⅱ自分が近く死ぬ運命にあることを予期していたにもかかわらず、それから逃げようとせず、また人にもそのことを告白し、同情を求めようとしなかった。ただ静かにその運命を受け入れていた。

こうした意見を中心に議論した。その結果、幾つかの共通認識が生徒の間から抽出できた。ひとつは、もちろん、「ひよこの眼」が「死を見つめる瞳」である以上、幹生の「人生に対する礼儀正しい」様とは、当然「死を見つめた」「死を予感した」ものであるということである。しかし、同時にそれは、「人生に対」して後

ろ向きなのではない。多くの生徒が指摘していたことだが、人生を前向きに最期まで生きようとする様が「人生に対して礼儀正しい」事だったに違いないということであった。

4 語り手の気づきへ

以上のような議論を経て、過去の亜紀と、今の語り手としての亜紀がどう変わったのかが問題になってきた。そこで、問三、かつての亜紀についての生徒の意見をプリントにし、議論した。問三で多かった答えは以下のようものである。

Ⅲ「中学三年生」の「私」は他人に恋をしているとからかわれる事を嫌がったり（恥ずかしがったり）、自分が解決できないうやむやとした疑問をどこまでも追究したりするところから、思うとおりにいかなことを知らなかった純粹無垢な「子供」のような性格として描かれている。「子供」だったからこそ、（幹生と楽しい時間を過ごさだけで）、幹生の絶望感を共有することができず、助けることができなかった。すなわち、「私」は、過去の「私」を未熟なものとして描いている。

こうした意見を元に、六・七時間目で議論をし、さらに、八時間

目に、そこでの意見をもとに生徒と議論をした。その結果、問題は、亜紀が何に気付き、何故このような物語を語ろうとしているのかというところにあるという結論に至った。

T：「語り手のいまの亜紀って、何でこんな物語を語ろうとしているんやろうな？」

S1：「先生、前、この小説は過去を相対化して語ってるっていうたやん。」

T：「それは、語られ方ではあるけど、語る理由ちゃうわな。」

S2：「大人になること」

T：「じゃあ大人になるって、どういうこと？ 前、幹生は、大人として描かれているっていうたよね。前のノート見てみて。」

S3：「自己」の境界の内に、他者を入れようとする人。」

T：「うん、誰かも書いてたけど、それって、『山月記』の李徴のよくな、尊大な羞恥心なのじゃなく、語り手の視点からは自他の別を知る存在として描かれているな。」

S1：「先生、そしたら亜紀が子供から大人になるって、自他の別を知るってこと？」

T：「そうやな、亜紀と幹生が付き合ひだしている場所で、亜紀が幹生の恋人として自信を持つてることを表すような言葉が出てくる

ねんけど、それってどこか探してみ。」

S2：「彼のひとみには、相変わらず涙の膜が張っているように見える。けれどそれは決してうわのそらの涙ではない。私がそばにいることが、彼のひとみをぬらしているに違いないのだ」

T：「そこやな。その場所で亜紀は幹生の内側にいるというか、エロスによって一体化しているとおもっていたはずや。でも、幹生は違ったわけやな。幹生は大人として、自分の本当の苦しみを亜紀にも漏らすことなく死んでいく。少なくとも語り手にそう思ってる。」

S3：「先生、最後の『ひよこの目』っていうのもこれと関係するのん？」

T：「お前はどう思うねん？」

S3：「うーん、声をかけへんっていうことは自他の別を知るっていうことやと思う。」

T：「うん。亜紀が『ひよこの目』をもつ人を見分けられるようになるけど、声をかけられへんのやな。これは声をかけへんというより、かけられへんのんちゃうか？ 所詮、自分は他の人には成り代われへんわな。そういうことが亜紀に、幹生の死をきっかけにわかっていくのんちゃうかな？」

S3：「それってうれしいこと？」

T：「そんなわけないわな。むしろ、苦しいやろ。自分の信じてた

もんが崩れてしまふんやから。しかも、亜紀は頭でわかっても、身体は相手と一体化しようとするんや。手を握りしめるってそういうことやろう。でも、苦しいときってお前ならんどうする？」

S4：「親とか友達とか信用できる人に話すかな。」

S5：「でもほっとしてほしいときもあるで。」

T：「うん、まとめると、苦しみのただ中にいるときは、語れへんのかな。逆にいうと、語るということは…。」

S6：「自分を冷静に見られてる。」

T：「そういうこと。そこに亜紀が語る理由もある訳や。自分というもん、アイデンティティが一旦崩れて、また再生する。その苦しみの中で語りが生まれるんや。もちろん、今の、『私』が過去をなつかしがってるっていう話は前出た通りやな。それと、苦しみを知った立場からは人生はどう見えるやろ？」

S7：「空しさ、とか…」

T：「それが語り手の見方やな。その空しさこそ、実は、語り手の聞いて欲しいことなんちゃうかな。それが、こないだの質問の亜紀の『ひよこの目』とも関わるかもしれないな。」

S8：「うーん。『ひよこの眼』って、生きるって大事なんやでっていうことだけ書いた小説かと思ってたら、意外に奥深いんですね。」

5 おわりに

これらの授業後、『ひよこの眼』で学んだことをふまえて自分のアイデンティティの形成について論ぜよ」という設問を出した。そこには彼らなりの語り手への批評がある。そして、ここにこそ（機能としての語り手）の顕現はあると考える。彼らの論の一つをあげる。

Ⅳ他者と関わらなければアイデンティティは形成されない。そしてそのためにはなるべく多くの他者と関わらなければならぬ。しかし普通の人間が生きていく上で、青年期に出会うことの出来る他者は限られている。亜紀がそうであったように、「学校」という閉ざされた空間に短くても九年は、封印され続けなければならぬからである。

では、どうすればいいのか。他者と関わりながら、それでいて他者に依存しないアイデンティティを形成していくためにはどうすればいいのか。

①「自己の中に他者を持つこと」。これは一つの解決策であると思う。「自己の中に他者を持つ」とはどういうことか。語り手の亜紀がそうであったように、「自分の意識の中に他者を作

り出す。」つまり、自分の言動に対してそれを批判しようとする、自分とは逆の存在を仮定するのである。

②ただし、繰り返し返すが、自分一人ではアイデンティティは形成されない。それは、独りよがりの価値観を作りだすだけだ。

あくまでアイデンティティとは他者から常に影響されながら、自己の中で批判しあい育てていくものなのである。

傍線部①で、この生徒は「私」の気づきを一旦、肯定する。しかし、傍線部②においては、それが、所詮自分の内側での他者にしか過ぎない危険性を主張している。

語り手の「私」は、先にも述べたように、過去を「私の中の他者」化している部分や、思いつきを美化している側面もある。しかし、私は授業の中でそれらのことをあえて指摘しなかった。語り手への批評こそ生徒という読者がすべきだと考えたからである。

作品は語り手、及び、〈機能としての語り手〉に注目することで姿を変える。単なるプロットの集積であることをやめ小説として生かすのである。「ひよこの眼」でいえば、語り手への注目が、単なる「生と死」の物語であることを停止させ、「私の中の他者」から「了解不能の《他者》」へという問題が明らかになる。そのとき、生徒は初めて、語り手と対等な立場に立って小説を批評し、それを自分の実生活に転移させようとすることになるのだろう。生徒

「ひよこの眼」の教材価値と実践試論

たちは、「ひよこの眼」を読みつつ次第に自己の問題点にも気づき始めていたようだった。教室という「他者」の中に隠れている自分たち。そういうことが、「ひよこの眼」という教材を実践していく中で、少しは彼らに見えてきたように思える。

注

① 牛山恵氏は「山田詠美『ひよこの眼』の教材価値」（田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ、『新しい教材論』へ6）、右文書院、一九九九年七月）の中で、教材としてまず、「晩年の子供」が注目された経緯に触れ、「それはその題材のきわだった現代性によるものであった」と述べられ、「ひよこの眼」が「教材として二番手だということはないだろう」とされる。

② 五十嵐哲也「教育の場にとりこまれた『ひよこの眼』——山田詠美『ひよこの眼』の教材化をめぐって」（『学芸国語教育研究』一九九九年一月）。

③ 田中実「小説の〈読まれ方〉に対する〈読み方〉の提起、〈語り〉の問題」（大槻和夫・須貝千里との対談（田中実・須貝千里編著『これからの文学教育にゆくえ』右文書院、二〇〇五年七月）。また、田中氏は「〈機能としての語り手〉」について、「一人称の〈批評する語り手〉はこれを対象化した〈機能としての語り手〉を想定」する必要があるとされる（田中実「断想Ⅲ——パラダイム転換後の文学研究・文学教育の地平を拓く」、『日本文学』二〇〇六年八月）。

④ 田中実「読みのアナキー」Ⅱ『還元不可能な複数性』を超えて」（『小説の力——新しい作品論のために』、大修館書店、一九九六年二月）。

⑤ 注1前掲論文。

⑥ 注4前掲論文。

⑦ 成田信子氏は、大学生になろうとする卒業生が「キャラを演じつつ」と言う言葉を使ったことを取り上げられ、「その高校という場では自分はそのような『キャラ』を創ってみた」というニュアンスを感じるとされている。そして、次のように言われる。

卒業生の言葉はさらに「見られる」と「見る」を逆転させ、「見られる」自分のみ肥大化させている。集団に合わせて自分の思いを決め、ふるまうということになる。相対的なとらえ方である。相対的でありながら「どのように見られているか」を判断しているのは自分である。自分と人が癒着しつつ、しかもかなり遠い。(成田信子「新しい文学教育の地平―実践への『水路』」『日文協国語教育』二〇〇四年五月。)

本校の先輩教員が分析した生徒の現状と酷似していると思う。

⑧ 藤原和好「子どもが見える授業の創造」(「子どもが生きる文学の授業―教室の主役たち」部活問題研究所、一九九一年六月)。

⑨ 六時間目では、次のようなやりとりが中心となった。

T:「亜紀ってどんな奴なんやろ」

S1:「どんな奴って、普通の女子中学生ちゃうの」

T:「それ普通といや普通かもしれないけど、亜紀が幹生と恋の噂を立てられて苦しんでいるところなんかはどう思う?」

S2:「目立つのが嫌って感じ」

T:「もう一歩突っ込んでみようか。亜紀が幹生に恋するようになってから言っている『私は、彼を悲しい場所には置きたくない』と思った。彼のことを心配しているというより、そうなら、自分自身がやるせないだろうと予想したからだった』はどう読む?」

S3:「結構、自分勝手な奴」

T:「そこまで言ったら言い過ぎになるかもしれないけど…」

S4:「ああ、子ども」

S5:「先生、でも、それってさっきの目立つのが嫌っていうのとどうつながるのん?」

T:「結局、子供でしかなかった亜紀は他人を自分の理想の中でしか捉えられへんわけや。他人より目立つのが嫌っていうのもその表れといっぺいかもしれないな。目立つのが嫌っていうより目立たされるのが嫌っていうこと。おい、S6、お前やったらどう? 男子校やし考えにくいかもしれないけど、恋の噂って立てられたい?」

S6:「先生、そういうのん俺にふんのんやめてや」

T:「まあ、お前らもやっぱ一緒やろ。みんなの中で隠れていたたい、みたいな気持ちはあるやろ。亜紀の恋愛も一緒なんちゃう。S6、お前大人の恋愛ってどんなんやと思う?」

S6:「だから、ふるのんやめてって。まあ、お互いに相手を好きっていうか…」

T:「うん、そこやね。幹生を、自分のために、不幸にさせたくないっていうのも亜紀の子どもっぽさの表れで、自分の理想の幹生像っていうか恋人像みたいなものがあって、それに幹生がうまくあてはまってくれへんかったらがっかりするわけや。ところで、さっきあげてくれた文、文末表現はどうなってる?」

S7:「からだだった」

T:「そう。ということは、今の語り手の亜紀はそういう過去の出来事を…」

S8:「過去のこととしてみてる」

T:「そう、別の言い方をすると相対化しているということや」

これらの議論の中で、ある生徒が授業後に、次のような質問をしてきた。

「先生、そしたら、今の亜紀もしかして『ひよこの目』をしているん？」

これは、考えようによっては面白い質問であると私は考えた、単純に「ひよこの目」を「自分の死を見つめる目」と捉えると、もちろん現在の亜紀はそれにあてはまらない。しかし、「諦観」ということの関連で考えてみるとどうなるのだろうか。私はこの問いをそのまま生徒に投げ返し、七時間目に生徒に次のような質問を出して作文させた。

問 「ひよこの眼」の授業で、ある生徒から、次のような質問が出た。「亜紀も、最後は『ひよこの目』をもつようになったのでしょうか？」この質問に、YESかNOで答え、その根拠も考察せよ。

生徒から返ってきた答えはNO派とYES派に別れた。NO派の多くの人が「亜紀は自分の死を見つめているわけではない」という論調だったが、それでも多くの生徒が幹生の死をきっかけに亜紀が変容したことを指摘してきた。では、「亜紀の現在」と「ひよこの目」という概念との間に何も共通性はないのだろうか。次にYES派の人の代表的な意見を見てみる。

僕はYESだと思う。「人間の思うとおりにいかないことがあるのを知り」の文からは、幹生が死んだことよって、今まで亜紀が入れなかった「諦観」という領域に踏み出したことがうかがえる。自分の初恋の人の死を経験したことにより、亜紀も「ひよこの目」をもつようになったのだと思う。